

## はじめに

和光大学は、一九六六（昭和四二）年に東京都町田市の東隅に誕生した、人文社会科学系の中規模私立大学（学生数約三〇〇〇名）である。設立の時期、場所、規模ともに平凡だが、他大学にない特徴を持っていた。「戦後大衆化した大学のあり方を考え試行する実験大学」という明確な旗を掲げたことで、提唱者の梅根悟初代学長が亡くなり設立四〇年の今も、この志は基本的に保たれている。母体である和光学園自体が、澤柳政太郎の創始した成城小学校の実験精神を受けつぐ小さな小学校として昭和初期に生まれ、戦後は新しい民主教育をめざすコア・カリキュラム連盟（のちに日本生活教育連盟）の実験校となった。梅根さんはその指導にも関わった教育史学者で、戦前戦中まで一部エリートのものであった大学が万人にひらかれたこの機に、あるべき高等教育を実践の中で探究することを、和光大学の使命としたのである。

私は縁あって開学時から一教員として理念の実現に微力を添え、二〇〇〇年の定年退職後直ちに、卒業生のその後を単独で自発的に追跡し始めた。実験ならば結果を検証するのが当然であり、またそれが後輩学生たちの指針ともなる、と考えたからである。私と会って話すか自稿かの二方法で一〇〇人近い記録を得て小冊子五冊にし、続く〇四年には旧職員二〇人ほどの同様記録を別

の一冊にした。

大学を構成する三者のうち、残るは教員である。かつて和光大学の専任だった教員は、この四年間に数十名に上るが、在職の時期・長短を問わずできるだけ多様な専攻にわたる二八名(定年退職一八、中途退職一〇)に、〇五年四月いっせいに依頼状を送った。「……諸ご体験、出会われた人びと、他と比して和光大学の長短所、さらにそれらを超えて生涯にわたるご研究や今考えていられることなどを、全く自由に、私と会ってお話しただくか、ご自分で文章にされるかをお選びいただき……『和光大学とは何であり、これからどうあろうとしているのか』を、やや長期・複眼的に、歴史と未来にわたって考えるものに……」云々の長文である。

二人が応じて下さり、本にまとめる際の配列は、原則として対談は実施順、自稿は到着順とした。後者の一人、杉山康彦氏は、自稿が私の手許に届いた数日後に急逝され、思わぬご遺言となった。

教員は何といっても大学の骨格、肉つけ両方に責任を持つものだから、自由な語りを重ね合わせると自然に、和光大学の特色やしぐみが誰にも見やすい形で浮かび上がるのでは、という期待が、当初私にはあった。そこで対談開始頃の数人には、多少意識した質問をしたり、地の文に解説めくことを書いたりした。が間もなく、対象者の個性や学殖、人間味など自体が面白くなり、ささやかな作爲はほとんど去った。この方々の生きてこられたそのままを虚心に描き集めることで、最も自然に和光大学の姿が見え、また和光に限らずあるべき大学を考える手がかりになるのでは、

と思えてきた。それは第一回入学登録の日の講話で梅根学長が、苦心して集めた教員たちを「静かにそびえるヒマラヤの高峰」にたとえ、学生たちが「自由な学習」をもって山々に挑み親しむことを大学の要諦として勧めた事実とも、符合する。大学はりっぱな建物や整った制度ではなく人だ、という平凡な真理に、改めて実感をもって立ち戻った気がするし、それは次々の世代へと手渡され熟していくものであろう。

目次に見る通り、全体を三部に分けた。まず梅根学長自身が創学を語る第一部で、前述した記念すべき初回の講話全文と、その前年に創学を視野に大学史大学観を語った短文から成る。第二部は対談記録集、第三部は自稿で、両方を望んだため二、三部ともに載る人もいる。最後に、本文中当然ながら度々登場する梅根さんのいわば全貌をまとめて語る文章を付けた。

いま日本の大学は、法人化少子化をはじめとする数々の難事に直面して、戦後何度目かの荒波にもまれていく。この小さな仕事で、単に個別和光大学四〇年の姿を描き留めるだけでなく、「これからどうあろうとしているのか」を高等教育全体のそれに広げて考える一基石となれば、と望んでいる。

最後に一言、ご協力下さった先生方、デザインを含め本作りに尽力いただいたみなさんに、心から御礼申し上げます。

二〇〇六年三月

石原静子